

考慮両立論と動物/人間の差異という問題

本間宗一郎(北海道大学)

ある者が相互に排他的な行為からなる選択肢の中からどの行為をするかについての考慮(deliberation)を行う際には、その者はその選択肢に含まれている行為を行うことができると信じているはずである。例えば、昼食にざるそばを食べるかたぬきそばを食べるかについての考慮をしている際には、ざるそばを食べることができるということと、たぬきそばを食べることができるということの両方を信じているはずである。しかし、こうした相互に排他的な行為についての考慮をする際に抱かれる信念は、一見すると決定論が正しいという信念と両立しないように思われる。なぜなら、決定論が正しいと、実現し得る出来事はただ 1 つだけだが、考慮の選択肢に含まれる相互に排他的な行為を行うことができる場合には、少なくとも 2 つ以上の出来事が実現し得ることになるからである。もしこの議論が正しいのなら、決定論が正しいと信じる決定論者は、我々が日常的に行うような相互に排他的な行為についての考慮を行うと、整合的でない信念を抱くことになる。その結果、決定論者は少なくとも 1 つの偽なる信念を抱くことで、真なことを信じよという要請に背くことになり合理的でなくなってしまう。このように、考慮の際に抱かれる、考慮中の行為を行うことができるという信念は、次の考慮非両立論(deliberation incompatibilism)が正しいことの根拠となっているように思われる。

考慮非両立論 S の考慮と S が合理的であることは、自身の行為が決定されていると信じるものと両立しない(cf. Pereboom, 2014, p. 106)

こうした議論に対して、次の考慮両立論(deliberation compatibilism)は、我々が考慮の際に考慮中の行為を行うことができると信じていたとしても擁護され得るとい議論がなされている。

考慮両立論 S の考慮と S が合理的であることは、自身の行為が決定されていると信じるものと両立する(cf. Pereboom, 2014, p. 106)

そうした考慮両立論の擁護の中でも代表的なものは、考慮中の行為を行うことができるという信念を、考慮中の行為を行うことが認知的または信念的に可能であると解するという方針である(Kapitan, 1986; Nelkin, 2011; Pereboom, 2014)。もしこの解釈が正しいならば、決定論者は相互に排他的な行為についての考慮によって非整合的な信念を抱かないということが起こり得る。なぜなら、決定論が正しい、つまり法則的または形而上学的に可能な出来事が 1 通りなののだとしても、そのことと、考慮中の諸行為を行うというような文や命題が自分の信念と整合的という意味で、少なくとも 2 通り以上の出来事が認知的・信念的に可能だということは両立し得るからである。

しかし、この方針はヴァン・インワゲンが提示した、一方のドアには鍵がかかっており、もう一方のドアには鍵がかかっていないが、どちらがどちらかはわからない状況にいる者の、どちらのドアから出るかという考慮についての説明がうまくできないと批

判された(van Inwagen, 1983)。一見すると、この者は、一方のドアが開まっていることはわかっているのだから、どちらのドアから出るかを考慮できないように思われる。しかし、この者にとっては、一方のドアから出ることも、もう一方のドアから出ることのどちらも、自身の信じていることと整合的だとしても構わないので、認知的・信念的可能性によることのみでは、この者がこうした考慮ができないことを説明できない。この不備を補うために、認知的・信念的可能性によって考慮両立論を擁護しようとする者は、自分の考慮が原因となっているという信念を考慮者は持っていなければならないということも合わせて要請している(Kapitan, 1986; Nelkin, 2011; Pereboom, 2014)。この要請により、ヴァン・インワゲンの例では、どちらのドアが開いているのかが無差別であることにより、自分の考慮が原因となって特定のドアを開けるということに関する信念は中立的であるので、必要とされている信念は抱かれていないという反論ができるようになる。

コフマンとワーフィールドは、こうした考慮両立論の擁護の方針によると、実際に考慮ができるはずの動物や人間の子どもは考慮ができないという帰結を導いてしまうという批判をした(Coffin and Warfield, 2005)。この 2 人によれば、こうした方針は考慮者に整合性や認知的・信念的可能性の概念、高階の信念、反事実的条件文を処理する能力を要請してしまうために、そうした概念や能力を持たずとも考慮ができるチンパンジーやアカゲザルといった動物や人間の子どもは考慮ができないという誤った帰結を導いてしまうという問題を抱えているのである。

本発表では、コフマンとワーフィールドによってなされた批判についての考察を通して、認知的・信念的可能性に訴えて考慮両立論を擁護しようとする際に直面する課題を明確にすることを目指す。具体的には、上述の方針が課す条件は、実の所ある種の動物でも満たせるようなものであるというペレブームの応答や、我々の関心は自由と深い関わりのある人間(の成人)が行うような考慮にあるのだから、考慮両立論の擁護においては動物や子どもは上述の方針が課す条件を満たせなくても問題ないというネルキンの応答を踏まえた上で、(1) 合理性を損なうことなく考慮するのに必要とされるのはどのような認知的・概念的な能力なのか、(2) そうした能力を動物や子どもは持つことができるのか、(3) 自由意志の発揮とも関わるような人間(の成人)が行うような考慮の独自性は何に見出されるのかという問いについて検討することで、そうした課題を浮き彫りにする。

主要参考文献

- Coffin, E. J. and Warfield, Ted. 2005, "Deliberation and Metaphysical Freedom," *Midwest Studies in Philosophy*, 29: 25-44.
- Kapitan, Tomis. 1986, "Deliberation and Presumption of Open Alternatives," *Philosophical Quarterly*, 36: 230-251.
- Nelkin, Dana. 2011, *Making Sense of Freedom and Responsibility*, Oxford University Press.
- Pereboom, Derk. 2014, *Free Will, Agency and Meaning in Life*, Oxford University Press.
- van Inwagen, Peter. 1983, *An Essay on Free Will*, Oxford University Press.